

[研究会報告 4]

Tutuba 語の音韻について¹

内藤 真帆

0. はじめに

南太平洋に浮かぶ Vanuatu 共和国 Tutuba 島では、およそ 500 人が Tutuba 語を用いている。この言語の先行研究としては基礎語彙 300 語ほどが音声記述されているだけである。本論では先行研究の記述を踏まえつつ、自身のフィールドデータに基づき現時点で明らかとなった事柄を記述することを目的とし、音素、音韻、音節構造、アクセントについて扱う。

1. Tutuba 語の音素

母音 /i, e, a, o, u/

子音 /b, t, d, k, ŋ, m, n, β, l, s, r, h/

このうち/b/, /d/は前鼻音化閉鎖音 [ᵐb], [ᵑd] である。これらの音素は語中に現れるとき、添加鼻音が明瞭に発音されるが、語頭に現れる時は、多くの場合において添加鼻音 [ᵐ, ᵑ] が脱落する。

2. 音声の世代間比較

音声を世代間で比較した結果、いくつかの差異が観察された。比較する上で対象としたのは Darrel Tryon による 1976 年以前の音声記述、2002 年に自身が調査した 70 代、30 代インフォーマントの音声である。ただし、先行研究の音声記述と今日の話者との音声を単純に比較したことは、その妥当性において更なる検討を要す。

¹2002 年 12 月発表

		先行研究の表記	70 代の発音 (2002)	30 代の発音 (2002)
/b/	‘head’	[^m patu]	[^m batu] , [batu]	高齢者に同じ
	‘fire’	[ampu]	[a ^m bu]	高齢者に同じ
/d/	‘blood’	[ⁿ dae]	[ⁿ d̥ae] , [d̥ae]	高齢者に同じ
	‘tooth’	[u ⁿ du]	[u ⁿ d̥u]	高齢者に同じ
/t/	‘one’	[etea]	[e̥t̥eja] ~ [eteja]	高齢者に同じ
/β/	‘banana’	[βatali]	先行研究に同じ	[ɸatali~fatali~vatali]

中年世代には一語中に /β/ が二つ以上存在しているとき、次のように [f] と [ɸ] の現れ方に傾向が見られた。音素 /β/ が語頭に現れるときは [f]、語中に現れるときは全て [ɸ] となる。

例 /βaβine/ [faɸine] ‘woman’

この他、/s/ が /i/ の直前では [ʃ] となること、/k/ が語頭に現れ母音が後続する時は有気音化するという音韻変化も見られた。

3. わたり音

Tutuba 語のわたり音には [j] と [w] があり、[j] が現れる場合には ① [i] と後続する限定された母音の間で生じる場合、② [i] が変化した場合、③ /e/ と /a/ の間で生じる場合、の三通りがある。同様に [w] が現れる環境は /o/ と /a/ の間、/u/ と前・中母音の間である。いずれのわたり音にしても例外が存在した。

わたり音 j :

① i と後続母音 (a, o, u) の間に生じるケース:

ɸ → [j] //i/_V(− front)

/io/ → [ijo] /io/ ‘yes’ → [ijo]

② V/i//a/ という音素配列を持つ三重母音の /i/ が脱落し、そこに [j] が生じるケース:

/i/ → [j] /V__a/

/uia/ → [uja] /airasuia/ ‘liquor’ → [airasuja]

例外① 後続する形態素により V/i//a/ となる場合は /i/ → [j] とならない。

/i/ → [j] /V__a/ /e-soai-a/ ‘push it!’ → [esoaiə]

例外② 同形の反復などにより /i/ と V(− front) が接する場合は [j] が生じない、もしくは弱く生じる。

/ia/ → [ia] /ariari/ ‘filth’ → [ariari]

例外③ 以下に示すように動詞の末尾に /a/ が接辞し、名詞化している語彙が幾つかある。この場合、/a/ は名詞のマーカーであると考えられる。

例: verb noun

marry/ marriage lai laia

このように名詞化により語末に母音連続がおこる場合も同様の变化をする。

/aia/ → [aija] ~ [aia]

marriage /lai/ + /a/ /laia/ → [laija] ~ [aia]

③ e と a の間で生じるケース:

ϕ → [j] // e / _ / a /

/ea/ → [eja] /etea/ ‘one’ → [eteja]

わたり音 w:

① o と a の間で生じるケース:

ϕ → [w] / o / _ / a /

/oa/ → [owa] /oari/ ‘root’ → [owari-]

② u と後続母音 (i, e, a) の間に生じるケース:

ϕ → [w] / u / _ V(− back)

②における例外:

例外① 語頭に現れる場合

/u/ → [w] / #V(− back)

/ue/ → [we] /uebe/ ‘pigeon’ → [we^mbe]

例外② 形態素の境界

/u/ → [u]

/ue/ → [ue] /βarukarueβati/ ‘car’ → [βarukarueβati]

この語は次の三つの形態素から構成されていると考えられる。

/βaru-karu-eβati/ /βaru/ ‘iron’ /karu-X/ ‘leg’ /eβati/ ‘four’

/karu-X/と/eβati/が接する際、二つの母音が連続して/ue/が生じるが、[uwe] とはならない。

4. 音節構造

Tutuba 語に可能な音節構造には V, CV, CVC, VC, CCV の 5 つがあり、このうち CV を音節の基本構造とする。

V /a=ba- na/ 'its wing' /bu=e/ 'pig' /βi=a=e/ 'tree'

CV /βi=tu=βo=βo=ra/ 'star' /ma=si=ma=si/ 'bird'

CVC ① /duβ=duβ / 'grass' /na=bar/ 'today' /sa=ŋa=ful/ 'ten'

② /laŋ/ 'wind' /nen=to=βon/ 'now' /ma-ma=lum/ '3SG - soft'

なお、CVC 構造には尾子音に①/β/, /r/, /l/と②鼻音が観察された。また、語頭には VC, 人称に CCV という構造が存在していたが、その数は極めて少ない。

VC /an=nan/ 'eat (1SG)' /aβ=βo/ 'tomorrow'

CCV /nna/ 'he, she, it' /nno/ 'you (2SG)'

5. アクセント

Tutuba 語はアクセント言語であると考えられ、基本的に語末から二音節目にストレスが置かれる。ストレスが置かれる箇所は強く発音され、長母音化する傾向にある。

[βi=já=e] 'tree' [βi=tu=βo=βó=ra] 'star'

語末が子音の場合は、語末から数えて一音節目にストレスが置かれる。

[nen=to=βón] 'now' [láŋ] 'wind'

参考文献

D. Jauncey.

1997 A Grammar of Tamambo, the language of western Malo, Vanuatu. A thesis submitted for the degree of Doctor of Philosophy of The Australian National University.

D. Tryon.

1976 New Hebrides languages: an Internal Classification. Canberra: Pacific Linguistics, C-50.

J. Lynch.

1994 An annotated bibliography of Vanuatu language. Suva: Pacific Information Centre.

1998 Pacific Languages: An Introduction. Honolulu: University of Hawai'i Press.

質疑応答 (敬称略)

向山 (コメンテータ): Tutuba 語は、南太平洋に位置するヴァヌアツ共和国で話されている 100 あまりの現地語のなかのひとつである。先行研究が乏しい中、発表者は単独でフィールドワークを行い、そのデータを詳細に分析している。今回の発表では、データ分析から得られた結果が簡潔にまとめられていた。

発表者の前回の発表は、Tutuba 語の /d/ 音に関する、純粹に音声学的な考察であった。異音、異形態に関する音声学的な考察を踏まえた上で、今回は、母音 5、子音 12 の音素が取り出され、さらに音韻体系が着実なかたちで考察されている。記述言語学にとって、最も基本的な要素が得られたわけである。

フィールドワークの具体的な手法、データ分析の際の問題点など、発表の中で触れられていなかった点についても興味深いのだが、ここではまず、発表内容に関して、ひとつ具体的な質問をしたい。

わたり音 [j] の 2. に関しては次のような規則がまとめられている:

2. /i/ が [j] に変化したと考えられる場合

/i/ → [j] __/V

例外の①: 後続する形態素により V/i//a/ となる場合は /i/ → [j] とはならない。(中略)

例外の③: 以下に示すように動詞の末尾に /a/ が接辞し、名詞化している語彙が幾つかある。(中略) このように名詞化により語末が二重母音、もしくは三重母音になる場合、上記の規則は当てはまらず、以下のようになる。

/aia/ → [aia] ~ [aija]

以上がハンドアウトからの抜粋だが、幾つかの疑問が生じる。まず例外の③に「上記の規則は当てはまらない」という表現があるが、これは例外①への反例が示されていると考えていいだろうか。また、語末においてこのようなヴァリエーションが見られるのであれば、そもそも例外をたてる必要があるのだろうか。

内藤: /aia/ は [aia] ~ [aija] と表されるが、揺れのひとつとして [aia] と発音

されることを受け、必ずしもわたり音 2. に示した /i/ → [j] _/V _/a/ という変化をとるとは限らない、という意味で例外として扱った。つまり、「上記の規則」とは例外の①を意味したわけではなく、わたり音 2. の規則を意図したものである。しかし、ご指摘いただいたように、もうひとつの揺れ [aija] が生じる場合、例外の①と③においていくらか矛盾を孕んでしまう。これらわたり音の生じる環境とその例外のあり方に関して再検討し、より妥当で分かりやすい記述を試みることにする。

三谷： 形態素の境界では生じない“揺れ”が名詞化する場合においてのみ生じるのであれば、話者に形態素の境界であるという意識が働いていない可能性も考えられる。

アクセントに関して、発表者はこの言語がストレスアクセントではなく、ピッチアクセントの可能性もあると悩んでいたようだが、仮にピッチアクセントであるとすれば、アクセントの置かれている箇所はより高く、強調されているはずである。テープを聴く限り、ストレスアクセントであることは間違いない。また、テープから、/r/ はふるえ音ではなく、はじき音ではないかと考えられる。もう一度確認したほうがよいだろう。

内藤： 今一度、/r/ がふるえ音であるか、はじき音であるか確かめることにしたい。

三谷： 音節構造における、CVC の尾子音の中で /n/ は歯音であるのか。それとも日本語のように口蓋垂音であるのか。

内藤： 尾子音の /n/ は歯音である。口蓋垂音で発音した場合、その音ではないと注意を受けることもあった。

三谷： 尾子音になりうるこれら六つは確かに子音であるが、母音性が高く、半母音に近い。しかし、厳密に閉音節とは言えないまでも、これらの音が開音節でないのも確かであることから、これらの音しか現れない、と明記した方がよいだろう。

浮田： 若い世代は、ピジンであるビスラマ語を用いて会話を行うこともあり、またビスラマ語の語彙借用が多いということだが、その影響は音声に現れるのか。

内藤： 音素によっては、若い世代において異音が観察されている（表参照）。明確な根拠を示すことは出来ないが、異音として用いられている音から推測するに、ビスラマ語の影響もあるのではないかと考えられる。

向山： 前回の発表では、/d/ 音のヴァリエントを弁別的な要素として捉えるべきであるかということを問題にしていた。結局、/d/ 音は弁別要素ではなかったということになる。/d/ 音のような多少特殊な音はあるものの、Tutuba 語が比較的単純な音韻体系を持っていたことは、独力で取り組んでいる内藤さんにとって、一つの明るい材料かもしれない。今後の研究に期待したい。